




犬のウンチを  
踏んだ日の人生



詩風エッセイ集



皆岡 樹史





# 目次

犬のウンチを踏んだ日の人生	
遠い灯り . . . . .	3
サイダー 1968 . . . . .	5
王冠の思い出 . . . . .	6
こめかみグリグリ . . . . .	8
犬のウンチを踏んだ日の人生 . . . . .	9
川向こうの工場街 . . . . .	10
ビンタ二十発 . . . . .	11
ハリアタマテツオ先生 . . . . .	13
初恋 . . . . .	14
風を集めて . . . . .	15
本当にあったモンペ婆さん . . . . .	16
大きな人 . . . . .	18
アンダーシャツ . . . . .	19
人物画の授業 . . . . .	20
中学三年の夏休み . . . . .	22
ぼくらのアイドル . . . . .	24
伽草子 . . . . .	26
二時間目 . . . . .	27
オイルショックとノストラダムス . . . . .	28
駝鳥とかぼっぶくとか . . . . .	30
1974年 . . . . .	31
修学旅行 . . . . .	32
笑い . . . . .	34
性格が悪い . . . . .	36
学校帰りの校門で . . . . .	37
第1号 . . . . .	39
最後の夏休み . . . . .	41
ラバー・ソウル . . . . .	42
風に吹かれて . . . . .	43
こっちを向いてくれ . . . . .	44
1976年3月 . . . . .	45

卒業アルバム	46
記憶違い	48
確かに今でも君はぼくの中にいる	49
卒業写真のあの人	50
奥付	
	53

犬のウンチを踏んだ日の人生



## 遠い灯り

幼い頃から、  
遠くの灯りを見ると、  
何か惹かれるものがあった。  
心がウキウキしてきて、  
夢や希望がふくらんでくるんだ。  
ところが昼間そこに行ってみると、  
別に大したものではなく、  
パチンコ屋の看板だったり、  
飲み屋のネオンだったりする。

そういえば人生のイベントだって  
同じようなものだ。  
そこにたどり着くまでは、  
遠い灯りを見るように心を弾ませているのだが、  
着いてしまうと何のことはなく、  
そこには日常生活が待っているだけだ。

たとえば修学旅行がそうだった。  
行くまでは何かと心がウキウキして、  
期待に胸をふくらませたが、  
ふたを開けてみると何と言うことはない。  
最初のうちこそ気も浮かれているが、  
そこにいるのはいつもの友だちや先生なので、  
そのうち浮いた気分も吹き飛んでしまった。  
「つまりは場所を変えた学校生活じゃないか。  
そんな中でいったい何を期待していたんだ」  
などと考えて、一人興ざめしていたものだ。

たとえば成人する時がそうだった。  
それまでは二十歳になると、  
何かを待っているような気がして、  
心がワクワクしていたものだ。

でもって期待に胸を弾ませながら、  
二十歳の時を迎えるわけだ。  
いちおうその日は周りが祝ってくれたけど、  
その日を過ぎると何のことはない、  
それまでの生活の延長が待っていただけだ。

遠い灯りはあくまでも遠い灯りであって、  
決して足下を照らしてくれるわけではない。  
とはいうものの相変わらず、  
ぼくは遠い灯りに憧れて、  
今もウキウキワクワクしているんだ。



## サイダー 1968

ピチピチ、ピチピチ、  
ピチピチ、ピチピチ、  
宿題帳の横にあるサイダーが、  
しきりにピチピチはねている。  
この問題を解いたら飲んでやる。  
そう心に決めてぼくは、  
算数の問題をずっと見ている。  
机の上には各科目の教科書と、  
読書感想文の課題図書と、  
何も書いてない二百字帳と、  
噛みあとのあるエンピツと、  
コンパスで名前を彫った三角定規と、  
あまり使ってない分度器と、  
無意味な消しゴムのカスでいっぱいだ。  
とりあえず視界から遠ざけた  
少年サンデーの今週号が気にかかる。  
ピチピチ、ピチピチ、  
ピチピチ、ピチピチ……

## 王冠の思い出

小学生の頃、夏休みになると決まって  
ジュースやビールの王冠を集めていたものだ。  
家で飲むものはもちろん、  
友だちからもらったもの  
駄菓子屋に落ちていたもの  
道ばたで拾ったもの……。  
中でも酒屋の空き瓶置き場は王冠の宝庫で  
数々の珍しい王冠を手に入れることが出来た。  
県外の特産ジュースの王冠  
なぜかジュース瓶に入ったコーヒー牛乳の王冠  
家ではお目にかからない酒類の王冠。  
当時は珍しかったオリオンビールや  
海外のビールの王冠もそこで手に入れたのだった。  
とはいえ、ぼくが一番好きだったのは  
そういう珍しいものではなく  
三ツ矢サイダーの青の王冠だった。  
当時の三ツ矢サイダーには  
赤の王冠と青の王冠があったのだが  
なぜか赤の王冠に安っぽさを感じ  
青の王冠に高級感や威厳を感じたものだった。  
元々黄色や赤系の色が好きだったぼくは  
ある日突然青系の色を好むようになった。  
サイダーの王冠はきっと  
その要因の一つになっているはずだ。

さて、そういやって集めた王冠も  
夏休みが終わると興味がなくなり  
いつも捨てていた。いや  
捨てられていたのだろうか。  
もしその時捨ててなかったとしたら  
缶物全盛の現在だ、  
けっこう価値が出たに違いない。



## こめかみグリグリ

先生から拳固でこめかみを  
グリグリされるのが嫌だった。  
だからぼくらは嘘つくことを覚え  
反射的に言い訳することを覚えた。  
先生はそれを見抜いていた。  
一度目は騙されたふりをしていたが、  
二度目は見逃してくれなかった。  
そして前にも増したこめかみグリグリを  
味わうことになるのだった。  
とはいえぼくも馬鹿ではない。  
今度は落ち度を見せまいと  
とにかくその先生の前では  
真面目に振る舞うことになる。  
先生はそんな姑息なぼくを見て  
フフンと鼻で笑っていたのだった。  
以来こめかみグリグリの記憶はない。

## 犬のウンチを踏んだ日の人生

基本は土を踏むのと何ら変わらないのですが、  
それを踏んだとたん、  
それまでの環境が一変してしまうものなのです。  
そのことを見聞きした友だちからは馬鹿にされ、  
あげくに好きなあの子に暴露され、  
ついには変なあだ名をつけられるのではないか…  
といらぬ心配をしなければならなくなるのです。

元はといえばあたりかまわずウンチをしまくる  
犬が悪いわけなのですが、  
ウンチを踏んだという運命に思い悩んでしまい、  
普段の行いが悪かったのではないか…  
と自分自身に反省を促したり、  
何でこの世に生まれてきたんだろう…  
なんて自己嫌悪に陥ることだってあるのです。

おかげでその日一日は、  
まるで人格を否定されたような憂鬱な気分で、  
人生を過ごさなければならぬのであります。

## 川向こうの工場街

中学生の頃、ぼくはいつも  
川向こうにある曇天の  
工場街を眺めていた。  
工場街とこの街を隔てた川は  
当時は壊れた状態で、その街の  
姿を映し出してはくれなかった。  
だからよけいにぼくの目に工場街の  
真実が映ったのだろう。  
むき出しになった幾何学的な建物群。  
鼻の奥に突き刺さる薬品の臭い。  
天地を引き裂く激しい音、音、音。  
人影のない錆びた工場だけが  
ぼくの目には映っていた。

二十メートルほどの橋を渡れば  
簡単に行ける場所なのだが、  
なぜかぼくには別世界に思えて  
そこに行く勇気が湧かなかった。  
きっとそのせいなのだろう、  
どうやっても川向こうに  
たどり着けない夢をぼくは  
何度も何度も見てきている。

## ビンタ二十発

何かちょっと違うな。  
体罰なら一発二発で終わるはずだ。  
ところがこの技術科の教師、  
こちらが抵抗しないのをいいことに  
手加減無しのビンタ二十発だ。

このビンタ二十発の原因というのが、  
授業中のおしゃべりだ。  
小学校の時もおしゃべりで  
ビンタを張られたことはある。  
だけど大概は一発止まりだった。  
体罰ならそれで充分なのだ。  
ビンタ二十発、  
小学校出たての中学一年生にとって、  
常識外の数値だ。  
というか暴力だろう、これは。

「もうしませんから、許して下さい」  
横で友だちが泣きながら言っている。  
教師は赤い顔をしてぼくを睨み、  
「おまえはどうなんだ？」と聞く。  
ビンタ二十発も張られるようなことはやってない、  
ぼくにはそういう自覚があるから、  
意地でも謝りたくない。  
とはいえ、友だちが怯えきっていて、  
もう限界なのだ。  
ぼくが謝らないかぎり、この惨劇は続くだろう。  
渋々ぼくは「もうしません」と言う。  
「次やったら、これだけではすまんぞ」  
教師の目は血走っている。

腫れ上がった顔を洗いながらぼくは思う。

奴はきっと、  
ぼくたちをしかるつもりなんて毛頭なく、  
最初からビンタ二十発張るつもりでいたんだ。  
だからわざわざ人目のつかない保健室裏に  
ぼくたちを呼び出したわけだ。  
ほてった頬がさらに熱くなる。  
ぼくの教師不信はこの時から始まった。

「こいつといるとろくなことはない」と思ったのか、  
それ以降友だちはぼくを避けるようになった。  
そしていつしか転校していった。



## ハリアタマテツオ先生

中学の頃に、  
『ハリアタマテツオ』とあだ名された  
理科の先生がいた。  
そのあだ名のとおり  
いかにも堅そうな髪質で  
寝癖でもついているのか  
いつも髪の毛の一部が  
針金のごとく立っていた。  
ハリ頭ではあるがハゲ頭ではなく、  
数多くの白髪が頭を覆っていた。  
そのせいでけっこう老けて見えたのだが、  
おそらくはその容姿よりも  
年は若かったに違いない。  
ぼくはある時期、  
そのハリアタマ先生のごとくに  
髪に癖がついてしまい  
セットできないことがあった。  
すでにその時は白髪も多くあった。  
そう、ハリアタマ先生と同じなのだ。  
よく自分でイメージしたものは  
現実化すると言われているが、  
もしかしたら心のどこかで  
ぼくはハリアタマ先生のことを  
意識していたのかもしれない。

## 初恋

いつのまにかの静けさがぼくに  
淡い恋心を落としていった  
思いもかけないことのように  
君を好きになっていた

こんな気持ちは初めてだった  
不意に吹き狂う小嵐が  
ぼくを包み込むように  
日々を攻めつけた

今思い起こしてみると  
それももう古い昔話  
今でも夢に出てくる、忘れたはずの  
君の笑顔少しぼやけて

ぼくの初恋はいたずら好きの風が  
落としていったおかしな夢  
思いもかけないことのように  
君を忘れていた

## 風を集めて

中学校の裏手には  
小高い丘が続いていた。  
人の入らないその丘は  
草がぼうぼうと生えていて  
蛇やムカデが棲んでいた。

空は滅多に晴れたことなく  
丘から下りてくる風が  
小さな校庭に落ちていた。  
ぼくらはその風を拾い集め  
空に向けて蹴り飛ばした。

風は力なく飛んでいき  
ゆっくりゆっくり空を舞い  
再び校庭に落ちてきた。  
ぼくらはそれを受けとめて  
力を込めて蹴り返した。

胸やのどに痛みを覚えた  
青臭坊主のぼくたちは  
飽きずに風を拾い集め  
空に向けて蹴り飛ばしては  
毎日憂さを晴らしていた。

## 本当にあったモンペ婆さん

中学生の頃だったな。  
居間で昼寝をしていた時に  
玄関の扉をトントンと叩く音がした。  
誰だろうと思いながら  
目を覚ましてみると、そこに  
ぼくの顔を覗き込んでいる人がいた。  
胸に大きな名札をつけ  
モンペをはいた婆さんだった。  
誰だか思い出せない。  
というか、知らない人だ。  
ということは『夢だ』と  
単純でのんびりした性格だった  
当時のぼくは思い、また目を閉じた。

しかしおかしい。玄関のトントンは  
ずっと続いているのだ。  
『やはり夢じゃないのか』と  
再び目を開けてみると、まだそこに  
先ほどのモンペ婆さんが立っている。  
起き上がって「誰だ!？」  
と言おうとした。ところが  
体が動かない、声が出ない。  
その状況にイラついたぼくは  
そのモンペ婆さんを振り払おうと  
力任せに手を振った。その瞬間  
場が変わったように感じた。と同時に  
モンペ婆さんはいなくなっていた。

玄関のトントンは現実だった。  
友だちが遊びに来たのだ。  
おそらくトントンの音に焦ったぼくが  
異次元の扉を開いたのだろう。

で、モンペ婆さんは誰だったのか？  
当時住んでいた所は埋立地で  
家の裏には防空壕の跡があった。  
モンペ婆さんは間違いなく  
戦時中の格好をしていた。  
ということは、その頃に空襲か何かで  
亡くなった人だったのではないか。

十数年後にその場所を訪れてみると  
家はすでに取り壊されており、跡地は  
駐車場になっていた。その時そこに  
一人のじいさんがやってきて  
おもむろに塩を撒き始めた。ぼくが  
「何をやっているのですか？」と尋ねると  
「あんたには見えんのですか？」と言った。  
そのじいさん、一ヶ月後に死んだらしい。

## 大きな人

中学二年のことだった。  
国語の授業で先生が  
Nという男に質問した。  
「大きな人と呼ばれる人がおるが、  
お前の知っている大きな人は誰か？」  
Nは立ち上がり  
「ジャイアント馬場」と答えた。  
教室内は大爆笑になった。  
「いや、そういう大きいではなくて  
人間的に大きな人という意味だ。  
誰がおるか？」  
Nは答に窮した。しかし  
先生は容赦なく答を追求する。  
「よく考えてみ。おるやろうが」  
Nは答えず、パニック顔をしている。  
「どうか、思い当たる人がおったか？」  
Nは一瞬間を置き  
「モンスター・ロシモフ」  
と早口で答えて座った。  
モンスター・ロシモフ、——のちの  
アンドレ・ザ・ジャイアントである。  
「馬場と変わらんやんか」  
ぼくたちは小声でそう言い合って  
クスクスと笑った。  
ところが国語の先生は  
「先生はその人のことをよく知らんが  
ま、そういう人ということやな」  
とNの答に納得していた。

## アンダーシャツ

小学生の頃、冬場はいつも  
長袖のアンダーシャツを着ていた。  
その上にセーターなどを着ていたわけだが、  
それを着る際にシャツの袖がめくれてしまい、  
それが妙に気持ち悪かった。  
その気持ち悪さを避けるために、  
シャツの袖口を手でつかんで  
セーターなどに袖を通していた。  
おかげでシャツはめくれはしなかったが、  
袖口が伸びてしまって  
上着からはみ出してしまう。  
それがえらくみっともないんです。  
小学生の頃はそれでもよかった。  
だけど学生服を着る中学生になってからは、  
それが不潔に思えるようになり、  
さらに異性の目が気になるようになってからは、  
それがえらく爺臭く感じるようになり、  
とうとうぼくは長袖のアンダーシャツを  
半袖のものに替えたのだった。  
半袖にすると今度はセーターが  
腕をチクチク刺してくる。  
それがまた気持ち悪くて、  
ぼくはセーターも脱いだのだった。  
つまり学生服の下は半袖のシャツ一枚。  
寒くないのかとよく聞かれたが、  
そういう感覚はどこかに飛んでいた。  
袖口がみっともなくなければ、  
ぼくはそれでよかったわけだから。

## 人物画の授業

人の顔を描いて何が面白いのだろう。  
画を描くことが好きな者にとっては、  
この作業は楽しいことだ。  
何でも自分探しに置き換えられる者にとっては、  
この作業は有意義なことだ。  
だけど画に楽しみを持ってない者にとっては、  
この作業は苦痛なことだ。

髪型がどうもしっくり来ない。  
右の目が小さくて気に入らない。  
二重のまぶたが気持ち悪い。  
眉毛がなぜか笑ってしまう。  
鼻がどうも整わない。  
鼻の下の筋が鼻水みたいに見える。  
開いた口から覗く歯が不安定だ。

パーツを描けば描くほど気になって、  
しかも手先が不器用だから  
なかなか全体像にたどり着かない。  
そうこうしているうちに  
時間切れになって提出できない。  
そういうことが積み重なって、  
通知表が1だったこともある。

だいたい何がうれしくて他人の顔の  
あら探しなんかやらなければならないのだ。  
あまりの下手さに相手から、  
「おれ、そんな顔してないやろ」と  
文句を言われたこともある。  
つつい面白おかしく描いてしまい、  
あげくにケンカになったこともある。



そもそも絵の具のにおいが苦手だし、  
パレットを洗うのが面倒だし、  
いつも服に絵の具がつくし、  
なぜか爪の中が汚れているし、  
先生は妙にオカマっぽいし…。  
何でこんな授業があるのだろう。  
大っ嫌いだ、人物画なんて。

## 中学三年の夏休み

中学三年の夏休み

八月のちょうど今頃だったと思う。  
親戚と近くの海に泳ぎに行ったんだけど  
その時クラゲに腕を刺されてね  
ひどく腫れ上がったことがあるんだ。  
刺された時の痛みが尋常じゃなかったので  
慌てて海から上がり  
そこに小便を引っかけたんだ。  
だけど痛みは引かず、却って増すばかり。  
そこで今度は海の家に行って  
アンモニア水をもらい  
刺された所に塗ってみた。

とにかく痛みが強烈で、さらには臭いも強烈で  
効いているのかどうかはわからない。  
だが他に薬もなかったし、海の家も親戚も  
「これで治る！」と言い切るから  
こちらも「これで治る」と信じるしかない。  
というわけで、帰る間際にもう一度  
海の家でアンモニア水をもらい  
それをタオルに染みこませ  
患部に当てて帰ったんだった。  
バスの中、あまりの臭気に  
周りの人からジロジロと見られ  
往生したのを憶えている。

ところが、その臭いの甲斐もなく  
患部は火ぶくれのようになってしまい  
暑いさなか、軟膏、油紙、包帯という  
暑苦しいものを腕に巻く羽目になった。  
完治したのは数週間後だったな。  
そうそう、そこが治る頃に

ちょうどその患部の下あたりを  
アイロンでやけどしたんだった。  
またしても火ぶくれで、軟膏、油紙、包帯だ。  
夏休みが終わる頃には草まけしたり  
中三の頃の思い出といえば  
こんな暑苦しいものばかりだ。

## ぼくらのアイドル

高校時代、クラスに  
アイドル的存在の女子がいた。  
かわいい顔をして、性格もいい。  
爆発的な人気というわけではなかったが、  
彼女に好感を持つ男性は、  
ぼくを含めて多数いた。  
そういう彼女の夢は、  
「すてきな人を見つけて、早く結婚したい」  
というものだった。  
それを聞いて、きっと彼女なら  
いいお嫁さんになるものと思っていた。  
彼女の結婚を聞いたのは、  
ぼくが社会に出て間もなくのことで、  
相手はけっこういい家の御曹司らしかった。  
「すてきな人を見つけて、早く結婚したい」  
という彼女の夢は叶ったわけだ。  
その後彼女は子宝に恵まれ、  
順調に主婦の道を歩んでいった。

そういう彼女と再会したのは、つい最近だ。  
仕事の関係である人と話していると、  
その奥さんという人が現れた。  
多少老け顔になってはいたが、  
かつてのぼくらのアイドル、  
そう、彼女であった。  
彼女はぼくだとは気づかなかったようで、  
主婦特有のせこさ、  
図々しい振る舞い、  
歯に衣着せぬ物言いで、  
ぼくに接してきた。  
そういう彼女の言動が恥ずかしかったのか、  
ご主人は「まったく女って奴は…」

というセリフを連発し、苦笑いしていた。  
長い主婦生活が彼女を変えたのか、  
もしかして元々そういう性格だったのか、  
そのへんはわからない。  
ただ言えるのは、  
かつてぼくらのアイドルだった彼女は、  
今では立派なおばさんになっているということだ。

## 伽草子

高校の頃ぼくは吉田拓郎に  
大層憧れていたものだった。  
「その生き方が好きなんだ」  
などと知ったようなことを言っは、  
よくその言動を真似ていたものだった。  
だけどぼくはその時期の拓郎さんが  
どういう生き方をしていたのかなんて  
まったくわかっていなかった。  
わかっていたのは拓郎は拓郎でも、  
マスコミの作り上げた  
いわば『マスコミ拓郎』の生き方で、  
それは無愛想だとか無礼だとかいうものだった。  
ぼくはそれを真に受けていたわけで、  
その言動を真似ていたというのは、  
つまり無愛想や無礼を真似ていたということだ。  
その『マスコミ拓郎』というフィルターで  
長年拓郎さんを見てきたせいで、  
実際の拓郎さんがどういう人なのかを  
いまだにぼくはわかっていない。  
ただ自分のことはよくわかっていて、  
『マスコミ拓郎』を真似ていたぼくは  
今でも相変わらず無愛想で無礼である。

## 二時間目

チャイムが鳴る。  
少し年配の痩せぎすな  
英語教師が入ってくる。  
ざわめいた教室が  
瞬時に静かになる  
「あー、どっから？」  
教室に彼のせっかちで  
野太い声が響き渡る。  
「えっ、どっからだ？」  
その日の授業の箇所を  
彼は生徒に尋ねているのだ。  
教室に薄い笑いが漏れる。  
その笑いを気にもせず彼は  
せっかちな授業を始める。  
生徒に一つの質問もせず、かつ  
生徒からの質問も受け付けず  
彼は一方的に喋りまくった末に  
せっかちな授業を終える。  
『起立、礼、着席』  
休憩時間、決まって誰かが  
英語教師のせっかちで  
野太い声を真似ている。  
「あー、どっから？」  
「えっ、どっからだ？」  
教室に薄い笑いが漏れている。

## オイルショックとノストラダムス

第一次オイルショックが起きたのは  
ぼくが高校一年の年の秋だった。  
世の中が紙不足と言って突然騒ぎだした。  
それを知って大変だとは思ったが、別にお尻が拭けなくなったわけでもなかったから  
ぼくに紙不足の実感はなかった。

そういうさなか、ぼくは当時の大ベストセラー  
『ノストラダムスの大予言』を買ったのだが  
それ以前に買った本とは明らかに  
紙の質が違っていた。  
とにかく紙の色が白ではない。  
藁半紙のような茶けた色になっていたのだ。

一読したあとに友人と  
「1999年7の月を過ぎたら  
もう一度この本を開こう」  
と約束していたのだが  
『こんな紙で果たして26年も持つのか』と  
その本の紙を見て不安になった。

ぼくが紙不足の深刻さを実感したのは  
その時が初めてだった。  
『さて、これからどうなるのだろう』  
そんなことを思っているうちに  
紙不足ブーム(?)というのが終わり  
徐々に普段の生活に戻っていった。

しかし…  
『ノストラダムスの大予言』は強かった。  
予言は見事に外れたものの、26年後の  
約束の月を無事(?)通過。さらには



その後十年以上経った今も生き延び  
今日も書棚の中で元気になっている。

## 駝鳥とかばっぶくとか

学生の頃、  
詩の授業のたびに  
「この言葉は何を意味するか」  
「作者は何を言おうとしているのか」  
などといった謎解きをさせられていた。  
本人じゃないんだから、  
そんなことはわかりもしない。  
わかりもしないことを、  
本人じゃない人から採点されるんだから  
面白くも何ともなかった。  
社会を憂う詩だとか  
人生を語る詩だとかよりも、  
恋愛テーマの詩だとか  
未来に希望が持てる詩だとかを、  
多感な若い時代に鑑賞したかった。  
つまり駝鳥とかばっぶくとかは  
どうでもよかったんだよ。

## 1974年

昔の記憶をたどる時ぼくは  
決まってあの年で立ち止まる。  
おそらくあの年がここまでで  
一番輝いていたんだろうな。  
だって太陽は眩しかったもん。  
風は背中を押していたもん。  
雨が降っても濡れなかったもん。  
踊るように歩くことが出来たもん。  
歌うように話すことが出来たもん。  
好きな人をしっかり記憶出来たもん。  
やることなすことが楽しかったもん。  
嫌な奴もいい思い出になっているもん。  
きっと一番輝いていたんだろうな。  
気の巡りもよかったんだろうな。  
あの年はきっとぼくの中で良い運の  
イメージになっているんだろうな。  
もしそうであるなら積み重ねてきた  
この人生の思い込みを捨てきて  
そこに戻らなければならないな。  
なに、今からでも充分に間に合うさ。

## 修学旅行

秋風の吹く晴天の富士スバルラインを  
バスは軽快に登っていく。  
バスガイドの説明そっちのけで  
ぼくたちは好き勝手に歌をうたう。  
誰かが『岬めぐり』を歌っている時、  
窓から湖が見えてきた。  
それが思い出のひとつになった。

白糸の滝で濡れながらの写真撮影。  
他のクラスの記念写真に  
霊の手が写っているとわかったのは、  
修学旅行が終わって数日後のことだった。  
とりあえずその時は滝に濡れた記念撮影、  
それが思い出のひとつになった。

修学旅行生がおみやげ屋に殺到し、  
どこにでもあるような土産を買っている。  
ぼくたちはそれを尻目に  
試食品を食べあさる。  
友人が試食品を箱ごと持ってきたものの、  
おいしくなかったのでえらく後悔している。  
それが思い出のひとつになった。

この日長嶋茂雄の引退試合があった。  
その時のセリフがこの先何年も何十年も  
語り継がれていくことになるのだが、  
ぼくのクラスの間は、  
誰も長嶋に関心を示さなかった。  
ただ、野球部所属の友人が  
富士急ハイランドのバッティングセンターで  
一球もかすりもせず三振した。  
それを見たクラスの全員が、

「甲子園は無理だな」と言い合った。  
それが思い出のひとつになった。

ぼくたちの修学旅行は富士山から始まった。  
そこから始まる思い出のひとつひとつが  
いくつもいくつも重なって、  
今では高校時代という  
ひとつの思い出になっている。

## 笑い

学生の頃はいつも一人笑いしていた。  
たとえそれが授業中であったとしても  
何かおかしいと感じることがあると  
いつも笑っていた、そのため先生から  
「何がおかしいんだ。集中力が足りん」  
と言われ、よく頭を叩かれていたものだ。  
いったい何がおかしかったのかという  
ちょっとした人のしぐさだったり  
癖のあるしゃべり方だったり  
とにかく他人からすれば何でもないことが  
ぼくにはおかしく見えてしまうのだ。  
逆に無理に笑わせようとする人には  
反応しなかった。そんなものには  
まったくおかしさを感じないのだ。  
いや、ひねくれていたわけではない。  
心の底からおかしくなっただけだ。

高校時代、授業中にみんなを笑わせようとして  
つまらないギャグを連発する先生がいた。  
他の人は笑っていたが、ぼくにはそれが  
おかしいと感じられず、笑わなかった。  
するとその先生は「なぜ笑わんか」と  
こちらに食ってかかってきた。  
「せっかくこちらが面白いことを言って  
授業の緊張を和らげてやろうとしているのに  
何でおまえは反応せんのか」と言う。  
『強要されて笑う笑いなんて  
本当の笑いではないと思います。  
本当におかしいと思った時だけ笑います』  
と思わず言いそうになった。が  
そんな馬鹿を相手をするのも面倒なので  
ぼくは黙り込んでいたのだった。

大したことのない事件だと思っていたが、  
いまだに記憶しているということは  
無意識のうちにそのことを  
引きずってきたのかもしれない。  
考えてみれば、その教師の事件以来ずっと  
素直に笑えなくなっているような気がする。

## 性格が悪い

はい、学生時代によくやりましたです。  
「クラスの女子の中で誰が一番きれいか？」  
などというランク付けをね。  
で、いつも一番は決まっている。  
きれいな人の順位なんて整形でもしない限り  
そうそう変わらんもんですよ。  
そのことに気づいたぼくたち男子は  
それでは面白くないというので  
「女子の中で誰が一番性格が悪いか？」  
というランク付けを始めたんです。  
誰もが、生意気なことばかり言っている  
あいつが当然選ばれると思ったものです。  
ところがです。選ばれたのは、なんと  
きれいランキング一位の彼女だったのです。  
これはちょっと意外だったですね。  
何でこういう結果になったのだろう。

今にして思えば、彼女はあまりにきれいすぎて  
ぼくたち男子にとって彼女は  
口を利くのも憚られるような存在だったのです。  
つまり彼女と喋った人はあまりいなかったわけで  
実は彼女の性格なんて、ぼくたち男子は  
よく知らなかったのです。見た目だけで  
勝手に冷たそうだと判断していたわけですね。

ま、そんなことよりも  
あんなランク付けに必死になっていた  
ぼくら男子の性格の方が悪かったのではないか。  
と、今のぼくは考えるのであります。



## 学校帰りの校門で

ある日の学校帰りのことだった。  
校門の前でぼくたちは、  
同じクラスの女子数人としゃべっていた。  
小春日和の穏やかな日で、  
外の日差しが妙に心地よい。  
その陽気に浮かれたのか女子の一人が、  
なぜかピョンピョン飛び跳ねている。  
少し天然が入ってはいるが、  
なかなかかわいい顔をしている子だった。  
何をやっているんだろうと  
ぼくたちは目を向けた。  
その時だった。  
彼女が着地する一瞬を狙って  
サッと風が吹いたのだ。  
彼女のスカートは見事にめくり上がった。  
着地した彼女は慌ててスカートを押さえたが、  
すでに遅かった。  
そこにいた男子全員の目に  
白いものが映った後だった。  
顔を真っ赤にした彼女は、  
ぼくたちを見回して  
「見えた？」と聞いた。  
ぼくたちは無関心を装いながら  
「いいや」と答えた。  
彼女はホッとした様子を見せながら、  
「ああよかった」と言った。  
とはいえバツが悪かったのだろう、  
そのままそそくさと帰って行った。  
それを見届けてからぼくたちは、  
脳裏に焼き付いている  
あの白いものを消さないようにと、  
その日は買い食いなどせずに

まっすぐ家に帰ったのだった。

## 第1号

白いボールは風に乗り、  
どこまでもどこまでも  
飛んでいった。  
その行方を目で追いながら、  
ダイヤモンドを必死にぼくは、  
駆けた、駆けた、駆けた。

一塁を回り、二塁を回る。  
このまま一気にホームを駆け抜けろ。  
と思っていたら、  
三塁にかかったところで、  
外野がボールに追いついた。  
どこまでも飛んだはずの白いボールは、  
スタンドまでは届いてなかった。  
外野はホームに向かって投げ返した。  
素人とはいえ強肩男。  
間に合うかどうかわからない。  
だけどたかが草野球、  
えーい行っちゃえ。

ぼくはホームを目指した。  
捕手は行く手を塞いだ。  
ボールが返ってきた。  
ベースが見えた。  
足がもつれた。  
前にのめった。  
そのまま倒れた。  
捕手がタッチ…。  
万事休す。  
と思っていたら、  
セーフ、セーフの大コール。

足のもつれがラッキーで、  
のめったのがラッキーで、  
倒れた場所がラッキーで、  
ラッキーの三位一体が、  
捕手のタッチをかいくぐり、  
第1号のホームラン。  
後にも先にもこれだけだった。  
生涯唯一のホームランだ。

## 最後の夏休み

高校三年の夏休み、  
ぼくらはドラムのセットを抱え、  
田んぼのあぜ道を歩いていた。  
空には一片の雲もなく、  
午後の日差しが頭をめがけ、  
容赦無しに降り注ぐ。  
ジージーワシワシ樹木の蝉と、  
ギーギーギッチョン草むらの虫が、  
だらしい暑さのリズムを刻む。  
ドラムを持つ手はふさがって、  
顔の汗さえぬぐえない。  
風もないから汗は乾かず、  
ポタリポタリとしたたり落ちる。  
気がつきゃ汗はスティックよろしく、  
スネアの腹を叩いてる。  
ツマランタタンと叩いてる。  
卒業後の進路のこととか、  
それを踏まえた勉強だとか、  
そんなものには関心もなく、  
ぼくらはだらしくツマランタタンと、  
田んぼの中を歩いていた。

※だらしい…北九州方面の方言で、「だるい」とか「かったるい」とかいう意味。

## ラバー・ソウル

部活を引退したぼくたちを待っていたのは、  
慣れない夕方ラッシュだった。  
それまでわりと遅く家に帰っていたので、  
いつもバスはガラガラだった。  
短い乗車時間だったけど、  
だだっ広い空間の中でぼくたちは  
疲れた体を横たえて寝ていた。  
それがあまりに心地よかったので、  
窮屈な夕方ラッシュは地獄に思えた。

地獄の思いをして早く家に帰っても  
受験勉強なんぞするはずもなく、  
西日の差し込む三畳部屋に引きこもっては、  
ビートルズのラバー・ソウルに針を落として、  
手当たり次第に本を読んでいた。  
今でもラバー・ソウルを聴くたびに  
オレンジ色が連想されるのは、  
夕日に照らされた三畳の部屋が  
心の中でよみがえるからに違いない。

## 風に吹かれて

北風の吹くバス停で、  
ぼくはジッとバスを待っていた。  
学生ズボンの生地は薄かったが、  
ズボン下なんて爺臭いと言って  
防寒もせず、  
常にその下はパンツ一枚だった。  
風はそれを知っているのか、  
脚をめがけて吹いてくる。  
おかげでぼくの脚には  
いつも鳥肌が立っていた。  
例えば手前のバス停まで歩けば  
待つ時間の短縮になっただろう。  
例えば待つ場所を変えれば  
寒さを逃れられただろう。  
だけどぼくは何もしなかった。  
というか、  
そんなこと考えもつかなかった。  
変に意地を張っていたのか、  
時間は無頓着だったのか、  
そいつは今となってはわからない。  
もしそういうことをやっていれば、  
もう少し違った人生を  
歩んでいたかもしれない。  
高校時代という多感な時期を  
ぼくは風に吹かれて  
ジッとバスを待っていた。

## こっちを向いてくれ

あいつはそこにいるんだけど  
なかなかこちらに気づいてくれない。  
お互い教室の中を  
行ったり来たりしているんだけど  
なかなかこちらに気づいてくれない。  
あいつはいつもの連中と歩いている。  
その連中との談笑に忙しそうだ。  
ぼくもいつもの連中と歩いている。  
だけどあいつの姿に気が行っている。  
「おい、おれに気づけよ」と  
ぼくは心の中で叫んでいる。  
「おい、おれの方を向けよ」と  
ぼくは仕草の中で叫んでいる。  
高校の三年間、ぼくは  
ずっとこんなことをやってきた。  
いや、もしかしたら、ぼくはいまだに  
そんなことをやっているのかもしれない。  
だって、三十数年経った今もなお  
あいつはそこにいるんだけど  
こちらに気づいてくれないんだから……。



1976年3月

さようなら、さようなら  
今日でぼくたちは卒業だ。  
ここまで付き合いのなかった人や  
同じ進路を歩まない人とは  
とりあえずこれでお別れだ。  
この先会うこともないだろう。  
特にクラスの違う女子たちとは  
二度と会わないに違いない。  
もし人生のどこかで彼女たちと  
すれ違うことがあったとしても  
その時はおぼさんのはずだから  
気づかないまま過ぎ去るだろう。  
さようなら、さようなら  
今日でぼくたちは卒業だ。

## 卒業アルバム

卒業アルバムを開くと、そこに  
変なポーズをとっている自分いる。  
撮影時、無愛想な顔をしていたぼくを見かねた  
写真屋さんが無理矢理ポーズをつけたのだった。  
そういういきさつもあり  
今でも見たくない写真の一つになっている。

その写真を撮った学校を卒業して以来  
一度も会っていない友だちが何人かいる。  
その人たちはぼくのことを  
おそらく忘れていると思う。  
こちらも忘れかけているのだから  
それは仕方のないことだ。

さて、そういう人たちがある日  
卒業アルバムを開いてみた。  
するとそこに変なポーズをとっている  
ぼくの姿を見つけた。  
彼はきっこう思うに違いない  
「ああ、こんな奴もいたなあ」と。

ま、それでぼくのことを思い出してくれたとしたら  
それはそれでいいことだ。  
だが大概そうはならない。  
その頃のことなんかけっこう  
忘れているものだ。ということで彼の  
ぼくに対する記憶はその写真から始まる。

その後何かの折りにぼくの名前が出たとする。  
その人は学生時代のぼくを思い出すことはない。  
「しんた？　・・・はいはい、あいつね」  
この点、点、点の瞬時に、彼の頭の中では

ある日見た卒業アルバムが思い出され  
ぼくの変なポーズが再生されるわけだ。  
・・・イヤだな、そんなの。

## 記憶違い

高校の卒業式の時に頑固一徹だった担任が  
ぼくの名前を呼ぶ時に急に声を詰まらせた。  
「毎日遅刻するわ、勉強は出来んわで  
いつも迷惑をかけられていた生徒だった。  
そうか、こいつもいよいよ卒業か」  
ぼくの名前を見て、そんなことを思い  
ついこみ上げてくるものがあったのだろう。  
敵対していると思っていたけれど、実際は  
心の奥深くで共鳴するものがあったんだ。  
そういう出来事がぼくの記憶脳の  
高校時代という括りの中に眠っている。

その記憶が何か違うような気がする  
と思い始めたのは、ついこの頃だ。  
そういえばあの日、担任は  
風邪を引いていたのではなかったか。  
ホームルームの時に鼻をシュンシュン  
鳴らしていたような憶えがある。  
それに加えて、あの底冷えのする体育館だ。  
ということで、あの時担任は  
別に思いがこみ上げたわけではなく  
実は風邪を引いていただけだった。  
そのせいでぼくの名前を呼ぶ時に  
鼻水がこみ上げてきたわけだ。  
きっとそれが真相なのだろう。ま、  
今となってはどうでもいい話ではあるが。

## 確かに今でも君はぼくの中にいる

あれは高校一年、国語の授業の時だった。  
何となく後ろを振り向くと、君がぼくを見ていた。  
その時からいくつもの歌を、君のために作った。  
だけど君にその歌を、聞かせることもなく  
時は過ぎて行った、ドラマなど起こらないままに。  
だけど、確かに今でも、君はぼくの中にいる。

高校二年の秋、ひとりで校庭を歩いていた。  
その時君が現れて、ぼくに話しかけた。  
ぼくは何と言っていいか、わからずに言葉を伏せた。  
あれが運命の分かれ道だったと思う。  
それ以来君と話すことに、ためらいを感じてしまった。  
だけど、確かに今でも、君はぼくの中にいる。

高校三年の冬、帰りのバスを待っていた。  
向かいのバス停で君が、バスに乗るのが見えた。  
ぼくはバスを目で追った。君の姿を探した。  
その時目に映った君は、ぼくを見ていた。  
それが君の最後の、さよならだったと思う。  
だけど、確かに今でも、君はぼくの中にいる。

あれから何年経っただろう、同窓会に君がいた。  
少し髪を伸ばした君が、ぼくを見ていた。  
今は遠くの空で、幸せに暮らしているという。  
そして今でもぼくは、君の歌をうたう。  
時は過ぎて行った、ドラマなど起こらないままに。  
だけど、確かに今でも、君はぼくの中にいる。

## 卒業写真のあの人

あの人は今でも魅力ある女性だ。  
かわいくて明るくて健康で  
さらに理知的で、機転も利いて  
昔から何も変わっていない。  
ぼくにとっての理想の女性なのだ。

ただ昔に比べるとかなり痩せていて  
肌の張りがほとんどなくなっている。  
そのへんはぼくもそうなのだが、  
その痩せ方に余裕がないというか  
すでに皺の域にまで達しているのだ。

とはいうものの、あの人はやっぱり  
卒業写真のあの人なのである。  
ユーミンの歌のごとく  
ぼくの青春そのものなのである。  
遠くで叱ってくれる人なのである。

だけど叱る時はあの皺なんだな。  
となればちょっと趣が変わってくる。  
近所の婆さんに叱られている気分になって  
ついヘラヘラ笑ってしまうはずだ。  
でも卒業写真のあの人なんだよね。

奥付





## 犬のウンチを踏んだ日の人生

著者：皆岡 樹史（みなおか たつし）

著者プロフィール：

- ・昭和 32 年 福岡県八幡市生まれ
- ・モットー：『人生万事大丈夫！』
- ・趣味：作詞、作曲、弾き語り。
- ・影響を受けた人：一遍、盤珪、高村光太郎、中原中也、ボブ・ディラン、吉田拓郎
- ・影響を受けた書物：「老子」「臨濟録」「日本霊異記」「徒然草」「延命十句観音経靈驗記」
- ・影響を受けたマンガ：「あしたのジョー」「人間交差点」「シュマリ」
- ・ブログ：[\[https://detan.net\]](https://detan.net)

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパプー (<https://puboo.jp/>)

運営会社：株式会社ブクログ

---

犬のウンチを踏んだ日の人生

---

著 皆岡 樹史

制 作 Puboo  
発行所 デザインエッグ株式会社

---